

ロマンの行方

ゴミへの

本文は、「ごみ問題解決のためには、市民の理解と協力が不可欠である」との認識の下に、一般市民に対し、「ごみに対する嫌悪感を取り除き、親しみを持つて接し得る意識の形成」「ごみ問題を意識した生活様式の確立」を啓蒙することをねらいとします。

この前文をつけた原稿を九州から編集部に向けてくださったのは本誌の読者・大沢正明さんだ。大沢さんは衛生工学の技術士で、ごみに関する論文を数多く発表している。

大沢正明さんのプロフィール
弘前大学理学部化学科卒。衛生工学部門技術士
(財)日本環境衛生センター九州支局勤務。

人並みにというほど華やかではありませんが、私にも、たとえ、駅のホームの片隅で人待ち顔に煙草の本数を重ねた経験があります。地面に捨てた吸い殻の数が情熱の証であるかのような錯覚(こう言い切ってしまった時から私の中年時代が始まったわけですが)に陥ったものです。自動販売機で買ったワンカップ大関を、まだ半分も飲まぬうちに、おもしろいロック塀にぶつけた青春時代もありました。カシャーンというビンの砕け散る音が今でも耳に残っています。あの時にはどんな出来事があったのだろ、うかと考えてみるのですが、どうしても思い出せません。苛立ちだけの青春だったなあ、と、ちょっと甘酸っぱい気持ちでビンの衝撃音を思い出さずには。カラーンという、空缶が地面を転がる音、こ

れもやはり挫折という名の青春時代特有の音でした。趣はがらりと異なりますが、意にそわぬ体験を強いられた女性が、衣類はもとより靴、ハンドバックにいたるまで、黒いごみ袋に包んでごみ集積所まで運ぶ……これは映画でよく見かけるシーンです。おおよそ「物」と名のつくものすべて棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられてしまった「物」達には、もはやロマンのかけらもありません。ロマンを失った「物」達はいつたいていどうしているのでしょうか。これが、これから私が話そうと思っているテーマです。

ごみ……ロマンを失った物達の名前です。吸殻も空びんも空缶もプラジャ

ーもバンテイも真赤なワンピースも靴もハンドバックも、捨てられた直後からすべて「ごみ」と呼ばれることとなるのです。ロマンを失ったごみを、心と生活の糧にしている人達がいいます。全国で十二万人プラスチックアルファ。十二万人はそれぞれ市や町や村でごみを収集し処理している人達で、アルファは、大学関係者、メーカー、コンサルタント、分析機関等の人達です。十二万人プラスチックアルファの中には、すてきな方達がたくさんいます。十万円もの専門書を有り金はたいてポーンと買ってしまふ青年、明日の環境問題を口角泡を飛ばして議論する中年のおじさん、目と耳と鼻に全神経を集中させて機械を操作する初老のおじさん。

……みんな、ごみという得体の知れない物体のとりこになった人達です。もう十年程も前のことになるでしょうか。南の小さな島で会った「若きキリスト」のことを、私は忘れることができませぬ。正確な年齢も、名前も知りませぬ。彼は、たまたま乗せてもらったごみ収集車の運転手をしていました。髪を長く伸ばし、顎髭をたくわえた風貌と、異様な目の輝きから、私は「若きキリスト」と心の内で呼ぶことにしたのです。その島にはごみを焼却する施設がなく、まだ臭いのするままの生ごみを直接埋立をしていたし、その上暖かい南方の島だったものだから、車の中はハエが我がもの顔に飛び

回り、とても不衛生でしたが、ふと見ると助手席側のダッシュボードの上に古びた画集が無造作に置かれています。聞いたことのない外国の画家の名前でしたが、あまりに場違いな感じがしてギョツとしたものです。あとで地元の人に聞いたところ、キリスト氏は画家の卵で、どこから来たか分からないが、もう二年もその島に住んでいるのだそうです。キリスト氏に会ったのはこの時だけでしたが、それからずっと、キリスト氏が描く絵はどんな絵だろうかと思いついてきました。雨に濡れたお人形……山間のくぼ地に埋め立てられた色とりどりのごみの山。すえたような臭いが立ち籠める中で、たぶん母親の手作りらしいお人形が、胴体までごみの中に埋もれながら、南方特有のスコールにうたれている……

ロマンを失った物達を眺めていると、人間のいろいろな生活が見えてきます。生まれてくる子供のために夜遅くまで手縫いの人形を作っている女性。人形を抱き締めて飛び跳ねる幼子。大人になって人形には見向きもせず青春を謳歌する娘達。キリスト氏の描きかけた絵には、そんなモチーフがあったのかもしれない。いつの日にかキリスト氏の絵が陽の目を見ることを願わずにはいられません。今、私もキリスト氏に倣って、しばらくはロマンを失った物達を追いつけてみたいと思つたのです。

私が棄てた……

乾電池

本文は、「ごみ問題解決のためには、市民の理解と協力が不可欠である」との認識の下に、一般市民に対し、「ごみに対する嫌悪感を取り除き、親しみを持って接し得る意識の形成」「ごみ問題を意識した生活様式の確立」を啓蒙することをねらいとします。

この前文をつけた原稿を九州から編集部に向けてくださったのは本誌の読者・大沢正明さんだ。大沢さんは衛生工学の技術士で、ごみに関する論文を数多く発表している。

私の長男が小学一年生の時、たった三行だけの作文を書いて、学級通信に掲載されたことがあります。

「ぼくのおとうさんは、よくほんをかつてくれるよ。もちろんまゆ（彼の妹の名です）のもしつよだよ。あまいおとうさんだね。」

つまり、私はかなりだらしのない父親です。だから、おもちゃの電池がぎれたとなると、たとえ夜であろうとコンビニエンス・ストアに走り、新しい電池を買ってきてやるのです。

で、使えなくなつた乾電池はというと……

昭和58年11月という時を、私達は忘れることがないと思います。

11月12日、全国の新聞がいつせいに「清掃工場から乾電池の焼却に伴う高濃度の水銀が発生」というような記事

を書きたてたのに続いて、その一週間後、今度は「清掃工場の焼却灰からダイオキシンを検出」という記事が大々的に掲載される。もう私達はパニック状態と言つてもいいような大騒ぎ。公表された数値を仔細に眺めて「問題ない」と胸をなでおろす人もいれば、水俣病やベトナム戦争の枯葉剤をいまだ鮮明に記憶に留めている方は「水銀やダイオキシンの検出されたというだけでも由々しきことだ」と頭を抱える。とりわけ深刻な影響を受けたのは、建設中の清掃工場を抱えた市町村の職員の方々です。状況がはつきりするまで工場の建設を中止しないという要求、これは当時日本全国のいたるところで起こつた現象なのですが、建設までの住民同意あるいは国庫補助の手続き等（これは比重が激減するか、白髪がど

つと増えるかという大変な仕事です）からやつと解放されたばかりの職員の方々にとって、実に辛い出来事でした。で、私はというと、不謹慎ながらほとんどはしゃいでいるといつてもいいような興奮状態でした。なにしろ、ごみ問題が社会から注目を浴びるのは、例の東京ごみ戦争以来のことですから、血わき肉踊るといつた具合でした。このように、全国の関係者を揺るがせた水銀・ダイオキシン問題も、あれから数年、社会的にはほとんど沈静化したといつてもいいような状態です。しかし、いつたいたどのような過程を経てこの問題が終結したかというところ、おそらく誰も答えることができないのではないのでしょうか。確かに、昭和60年7月に厚生省からいわゆる安全宣言といつたものが出されましたが、一般市民の方々がそれで完全に納得したとは思えません。多くの人がモヤモヤした感情を残しながら「飽きていつた」というのが実状ではないのでしょうか。しかし、翻弄され続けた私達としては、簡単に飽きてもらつては困るという気持ちがあります。先に書いた、「問題ない」と胸をなでおろした人、「由々しき問題だ」と頭を抱えた人、どちらが正しいかということも含めて、ぜひ知つておいていただきたい若干の数値があります。

15マイクログラム・パー立米……：大気中の濃度がこれ以下ならば健康に害を及ぼさないと、世界保健機構(WHO)が定めた数値です。この数値を基準にすると、私達が日常呼吸している空気中の水銀濃度はその約五千分の一です。そして、ごみ焼却場から発生する煙が地上に下りて来た時の濃度は、最も気象条件の悪い時を想定すると五百分の一から二千分の一になります。このことから、二つのことが言えると思うのです。一つは「濃度的には極く僅かな数値である」ということで、もう一つは「焼却場から舞い下りてくる煙は、一般環境の十倍近くの濃度の水銀を含んでいる可能性がある」ということです。

そこから、二種類の選択が生まれまします。一つは「問題のない数値なのだから、今のままでよい」という考え方で、もう一つは「少なくとも環境を悪化させているのだから、乾電池は焼却すべきでない」という考え方です。現に、今それぞれの市町村で、この二つの方法のいずれかが採用されています。さて、どちらの考えが正しいかとなると、圧倒的に後者ではないのでしょうか。たつた一つの条件を除けば、誰だつてそうします。その条件とは、コストの問題です。乾電池を別の方法で処理するととなると、現在のところ北海道のイトムカという所に送らなければなりません。たとえば、福岡のある町の場合、運送費・処理費合わせて十トンで百万円。これが選択の条件となり、市町村の職員の方々の苦悩はここから始まるわけですが、実はこの選択、税金を払う市民一人一人が負わなければならない選択でもあります。

去年のクリスマスに、我家の子供達は、おばあちゃんから、ネジ巻きのサントナ形をもらいました。意外と喜ぶのですね。自分でネジを巻いて動かすのが楽しいらしいのです。乾電池で動くおもちゃが高級だという先入観は、私達おとなの思い違いなのではないかと反省させられた今年の正月でした。

随想

第3回

ゴミへの

私が棄てた……

ジュース缶

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちにもよつと優しい目を向けた、本誌読者・大沢正明さんから寄せられた生活エッセイです。

公団住宅からささやかながらも一軒家に移り住むようになってから数年。

二カ月に一回、土曜日の夕方になると決まって妻はてるてる坊主を逆さに吊すようになりまして。日曜日の朝八時から、家の周囲と近くの公園の一斉清掃があるからです。日曜日は九時起床と決めている妻にとっては、大変な苦痛のようで、新聞の天気予報、テレビの天気予報を調べ回った挙げ句、ついにはてるてる坊主を逆さに吊します。

妻のそんな様子を見てみると、二十一年程前にラジオの深夜放送で聞いた大学生の投稿を思い出します。彼は東京のある駅でアルバイトをしていたのだそうですが、一日中ホームの吸い殻掃除でうんざりしてしまつたということ。掃除をしても掃除をしても、棄てる人とのいたちごっこ。腹立ちまぎれに、彼はこういって投稿文を終えるのでした。

「たばこを吸われる皆さん、どうぞ、

吸い殻はホームではなく、線路の方に棄てて下さい。あそこなら、僕らは掃除しなくてよいのです」

かくも、掃除とは憂鬱な仕事なのですが、ある時、妻がただならぬキンキラ声で不満をぶちまけます。聞くと、その日の自治会の会合で「〇×組（私の家）の自治会の組番号です」は、他に比べて空地の汚れ具合が著しい。もう少し、公共の美観に留意すべきである」と指摘を受けたというのだそうです。

「そりゃ汚れていることは確かだけれど、汚すのは私達じゃなくて、通りすがりのよその人達なのだから、私達が叱られるいわれはない」と、それは恐ろしい剣幕でした。

さて、この空き地の掃除、法律的にいうと、誰がしなければいけないのでしょうか。

廃棄物処理法第五条には、「土地又は建物の占有者は、その土地又は建物の

清潔を保つように努めなければならない」といった趣旨の条文があります。つまり、法的には、まず空地の持主に掃除することを要求すべきだったので

最近、空地の美観が大きな問題になっていきます。総理府が昭和63年に行った調査によると、約10%の人が空き地のごみや草木の繁殖などの被害を受けたことがあると答えていますし、33%の人が空地に放置されているごみは公害であると主張しています。こういった空地のごみや道端あるいは公園の空缶は、家庭から出されるごみと違って、集めにくいというやっかいな特徴があつて、実のところ、まだ有効な対策が見つかつていません。

こういった散乱ごみに限らず、ごみ対策には、「排出規制」と「処理対策」の二通りの方法があります。どうしたらごみが出てこないようになるかという方法と、どうしたら発生したごみをうまく処理できるかという方法です。

「デポジット制」は空缶の排出を規制する方法として現在注目されています。例えば百円のジュースを百十円で販売し、飲み終わったジュース缶を販売店に返した時点で缶代の十円を返してもらふというもので、消費者にとっては、一升びんやビールびんですでに定着している方法と同じです。回収した空缶は資源として再生利用することになります。現在全国数十カ所の公園や観光地等の閉鎖的地域で実験的な試みが行われ、空缶の散乱がある程度減

少しているという報告がなされています。確かにこの制度を法制化し、全国的に実施すればかなりの効果が期待できるでしょうが、まだまだ課題が残っています。販売店の手数の増加、空缶の保管の方法、缶以外のたとえばビンとかプラスチック容器の取り扱いをどうするか等々。最も考えなければいけないことは、人々の感情の問題です。先に、一升びんやビールびんと原理が同じだと書きましたが、ひとつ大きく異なる点があります。

一升びんやビールびんは、洗浄してまた利用するために回収するわけですが、空缶はそのままでは再利用できません。棄ててしまわないように十円というお金を課すのです。極端な言い方をすれば、十円で人のモラルを縛るという方法です。この考え方が一億総中流意識の日本人に馴染むかどうかは難しい問題です。

「処理対策」の代表格は、私の妻が最も苦手とする、自治会あるいはボランティア等による集団掃除です。環境庁が昭和62年度に全国の市町村に対してアンケート調査を行った結果によると、「PRの強化」等十数種の対策の中で、「かなり効果があつた」と評価された方法のトップは「住民による空缶回収」で、「ある程度効果があつた」も含めると88%にも達します。

そういうわけで、今も私は、二カ月に一度の日曜日、惰眠をむさぼる妻の目覚まし時計の代わりをせせと努めています。

私が棄てた……

醤油の容器

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちにもよつと優しい目を向けた、本誌読者・大沢正明さんから寄せられた生活エッセイです。

空き缶を10個、テグスで結わえて、東にして、腰のベルトに巻き付ける。それを引きずりながら、街をトボトボと歩き回る……。今のおれって、そんな感じだなあ、と思っていた時がありました。随分長い間続きました。18才から30才までの12年間。

あの時の空き缶がプラスチックの容器だったらどんなだろうかと考えることがあります。

「軽いなあ」

「泣けてくるよな軽さだなあ」

空き缶というのは以外に重いのだな。青春の空虚さには不思議な重みがあるのだな、と最近感じます。

スチール缶やアルミ缶、それにガラス容器が減ってきました。その代わりにプラスチックの容器が増えてきています。たとえば、醤油の容器は、昔は一升瓶がほとんどでしたが、いつの頃からか……。実は、昭和52年を境にして、醤油の容器はプラスチック製のものに変わってきました。

ペット(PET)容器といえます。ポリエチレン・テレフタレート。容器革命の担い手です。醤油に限らず、食用油、洗剤、ソース、大型ビールなどの容器としても利用されていますし、清涼飲料容器も、割れない、見た目が美しいなどの理由から、生産量が増えています。東京大学の藤田教授の予測によると、今後のペット容器の伸び率、生産量共に最も大きくなるのはビール容器だそうですが、さて、このペット容器がごみとして多量に排出された場合、いくつかが心配されることがあります。まず、軽くて割れにくいという、容器としてはすばらしい特徴。しかし、これがごみになると、かさばって回収車で運搬する際に大変効率が悪く、そのまま埋め立てる場合も効率が悪く、それでは埋め立てる前に焼却しておこうということになると、よく燃えすぎで問題です。よく燃えるということは、焼却工場にとって良いこともあるのですが、熱もガスもたくさん出るわけ

ですから設備に負担がかかってやはり効率が悪くなるという欠点があります。しかし、何よりも一番懸念されるのは、ペット容器を缶や瓶と同じようにそのまま街に棄てられてしまった時のことです。

たとえば、お花見でビールをしまったま呑んだとすると、ガラス瓶なら酒屋さんに戻せば5円が返ってくるというので、極端に酒癖の悪くない人であれば人は持ち帰ります。鉄やアルミの空き缶もビール瓶ほどではないにしても、誰でもつぶして溶かしたら原料として再生利用できることを知っていますから、空き缶専用のごみ箱に入れるか、持ち帰って集団回収に出すかもしれません。ところが、ペット容器の場合は、今のところ焼却して埋め立てるしか方法がありませんから、せいぜい近くのごみ箱に持って行くということになります。すると、軽くてかさばりやすいものから、ごみ箱はすぐに満杯になります。そこに風が吹いたりすると、もう大変です。桜吹雪とごみ吹雪。今時、花見会場に桶屋さんが居会わせるなんてことは滅多にありませんから、風が吹いて得する人なんかいません。損する人の筆頭は、下戸の花見客。酒好きの人は本質的に桜なんかどうでもいいわけですが、しらふでごみ吹雪を見せられる人はたまったものではありませぬ。

その公園の清掃を担当する人も負わずに大損です。ごみ箱のごみを定期的集めるだけでも精一杯なのに、桜の木の下、植え込みの蔭まで転がったごみを毎日毎日清掃する余裕はとて

りませぬ。自分たちが汗水たらして集めたごみが、氷山の一角ならぬごみ山の一角だったということになると、情けない気分になるでしょう。

ごみ箱に棄てるならまだしも、私たちがよく目撃するように、公園や道端に無造作に棄てられるケースも多いようです。練馬区生活学校の川上クニさんが高校生147人にアンケート調査したところによると、約70パーセントが過去に空き缶をポイ棄てた経験があり、その多くの人がほとんど良心の呵責を感じなかったということだそうです。

良心の呵責ということを考えると、缶よりもプラスチック容器の方がもっと心に対する負担が軽いような気がします。(これは、70パーセントの内の一人である私の経験的なカンです)。ペット容器を恐れる所以はそんなところにあります。

福岡大学に田中綾子さんという大変チャームिंगな(という噂です)女性がいらっしゃいます。この方は一風変わった研究テーマを抱えていて、たとえば、街角に置いて絵になる「ごみ箱のデザインはどうであるか」とか、ごみ箱にシンボル・マークを貼付することによって、ごみ箱としての存在感はどの程度高まるかといったようなことを考えているのだそうです。いかにも女性らしい繊細なテーマなので感心してしまつたのですが、なるほど、これからごみ問題は女性特有の感覚が大きな力になるのではないかと思つたものです。これほど日常生活に密着した問題は少ないのですから。

私が棄てた……

犬も食わないゴミ袋

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ゴミ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちにちよつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

人口6千人の田舎町に生まれたこと

で、私は過去40余年の人生をどれほど苦勞してきたことでしょうか。マナーがスマートではない、言葉になまりがある、着るものがやぼったい。東京に出ることがあつても、周囲全てが私を嘲笑っているような気がして落着かないし、たまに誉められることがあつても、せいぜい純だ素朴だと、40過ぎの中年おじさんとしては、はなはだ不名誉な評価。第一、人から出身地を問われても、まともに郷里の名を言えないのが辛いところ。〇〇市からバスで2時間の町で……と長たらしい前置きを付けたいと誰も分かってくれませんが、ところが、昨年から遂に私も都会人の仲間入りをしました。両親が兄と姉の住む大都会に引越したからです。これで、人から帰省先を問われても一発回答できるわけだと、昨年意気揚々と引越しの手伝いに行つて来たのですが、新宿に移つてます母が気に入ったことは、

「スーパー・マーケットはどこ？」

「バスの停留所は？」

そして、

「ごみ出し日はいいつ？」

この3つでした。

ごみ集積所は、多くの市民にとってごみと関わりを持つ、最後の機会になります。ですから、各市町村とも、ごみ出し日あるいはごみ集積所の問題には大変な神経を使います。よい市役所よい町役場であるためには、なるべく住民の都合のよい方法を採用したいと願います。

ところで、住民にとってより良いごみの排出方法とはいったいどんな状態でしょうか。

1、何時でも何処にでも出せるように。
1、何でもどんなごみでも持つていくように。

1、美しく清潔な集積所にするように。
この3点が満足されれば、よい市役所、よい町役場というイメージはグン

と上がるのではないのでしょうか。

ところが、市町村が配布する「ごみ出し方」のパンフレットには、必ずといっていいほど「燃えるごみは何曜日何時から何時まで、燃えないごみは……」といった具合に、指定の曜日、時刻、ごみの区分、出してはいけないもの等が事細かに書かれてあつてさらに念の入ったことには、「ごみは決められたルールを守つて出しましょう」と、書き手の苛立ちすら感じさせる朱文字がドーンとパンフレットの真ん中に記入されています。なぜ、このように、よい市役所よい町役場というイメージを放棄してまで、事細かなルールを定めなければいけないのでしょうか。

市町村側には3つの事情があります。

まず第1点は、コストの問題です。今、ごみを1トン処理するために約2万円の費用がかかります。このごみ1トンという量は、1世帯3、4人の家族が1年間に出す量にあたりますし、街中でよく目にするごみ収集車の70%から80%にあたります。この1トンのごみを処理するために要する2万円という費用、焼却施設の建設費とか電気代とか、いろいろなことに使われるわけですが、実はその60%強はごみを取集するための人件費になります。(概略的な数値を並べてみますと、収集60%、処理30%、埋立10%という具合です)本来なら、収集のための人件費をたっぷり確保して、収集回数を増やし、集積所をきれいに清掃したいわけですが、たとえば収集の頻度を1回増やすためには、何台分かの収集車の購入費と、1代あたり2人から3人分の人件費がかかります、ただでも予算を確保しにくい

ごみ処理経費がグーンとアップします。

第2点目は、処理技術の問題です。集めたごみを何でもかんでもひつくるめて処理し、可能な物は資源化し、残りを極力減量化するという技術はまだ完成していません。現在は、燃えるごみは焼却し、燃えないごみは破砕機にかけて、その過程で可能な物は資源化するという方式が一般的です。ですから、どうしても集積所で分別しなければならなくなります。何でもいっしょに収集し、処理施設で分別するとなると、莫大な人件費と設備費がかかりますし、技術自体がまだ未熟ですから、いろいろな問題が出てきます。

第3点目は、収集に関する事故が非常に多いということです。収集車の押込み装置に挟まれて死亡したという重大事故がたまに新聞に掲載されることがあります。しかし、現場ではそれ以外にも、たとえば、重い物を持つことによるギックリ腰とか、むき出しのガラスとか鉄片による怪我とか、新聞には掲載されないような事故が非常に多いのです。

犬も食わないゴミ袋……ちよつと、そられる商品名です。犬や猫に食いつ荒されて汚れた袋になったごみは嫌なものですが、破れた袋から我家のごみを人に見られるのは、なにやら恥部を覗かれるようで恥ずかしいものです。国立公害研究所の中杉修身氏が東京都下8市1000世帯に対してアンケート調査をした結果によると、約20%の人が、集積所の後始末が雑であるとの不満を持っているとのこと。自治体にとつても、やはりそられる商品名でもあるようです。

私が棄てた……

もみがら

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちをちよつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

誰でも、自分自身の「季節の基準」を持っていきます。それは四季折々の花であつたり、旬の食物であつたり、ファッションであつたり、人それぞれの世界があります。

私の場合で言えば、15年前九州に住むようになってから、稲田の風景が「季節の基準」になりました。なにしろ移り住んだアパートが2DK風呂付きで9千円というその当時でも驚くべき条件だったのですから、辺り一面が田んぼ。春は日曜日になるといっせいに始められる田植え、雨期のかえるの合唱、刈り取りの秋、四季それぞれに馴染み、たとえば「春までには……したい」の代わりに、いつの間にか「田植えの頃までには」という表現が習慣になっていました。とりわけ好きな風景は、刈り取りの終わった後のモミ焼きです。あたり一面が煙に霞み、冬間近という季節も相まって、物悲しい、それでいてちよつといい気分にはさせられます。

しかし、考えて見れば、モミを焼くあの煙は、ごみ焼却場から発生する煙の何倍もの濃度になるはずで、それなのに何故私達はモミ焼きの煙を許し、ごみ焼却場の煙を許さないのでしょうか。たとえば冬になれば、ごみ焼却場の煙突からは水が凝結してできる真っ白な煙がモクモクと出て来ますが、それを見て「ああ、今年もまた寒い冬がやって来た」と感慨にふける人は、まずいません。白煙が消え始める頃に春を感じる人もいません。何故でしょうか。答えは比較的簡単なように見えます。私達は米あるいは稲穂にはよい印象を持っていますが、ごみには悪い印象を持っていくからです。北海道大学が札幌市民に対して行ったアンケート調査によると、「ごみ」から連想する色は灰色が最も多く、次いで黒、茶の順になるのだそうです。

このごみの持つイメージが、ごみ問題を考える上で最も根底をなすものです。ごみのイメージが、緑とか青とか

オレンジとかそういう明るい色に変われば、ごみ問題の大半が解決するといつても言い過ぎではないでしょう。「アメニティ」という言葉が、最近ほつぽつ聞かれるようになりました。駅のプラットホームの掲示板に「やすらぎのアメニティ空間」などというヘッドコピーを付けた不動産の広告が掲示されていることがあります。

「快適な空間」という日本語が一般的に使われています。環境問題としては、昭和50年頃から少しずつ話題になり始めたテーマです。公害防止よりもさらにグレードの高い環境を表すもので、自然環境を保全するのはもとより、自然に親しめる遊歩道や広場を整備したり、街中のたたずまいを美しく、気持ちの良いものにするといったことが具体的な手法になります。

ごみ問題にもこの概念を適用できないものだろうかというところで、いろいろな工夫がなされつつあります。代表的な例が角型の煙突です。昭和40年代に全国各地で問題化した工場排煙の影響が、私達は丸く灰色のコンクリート煙突を見ると即、公害をイメージしてしまう。それならば角型にしてみよう、ついでに時計の文字盤も植え込んでみようというわけですね。

今、ごみ焼却場のアメニティ化の方法として、概ね3つの方法から検討されています。

ひとつは、公害を発生しない安心できる施設であること。ふたつ目は、施設が存在することによって利便性が増すこと。3つ目は、建物自体が視覚的に美しく気持ちの良いものであること。「安心感」ということで考えてみると、まず公害を無くすることが大前提

になります。残念ながら古い施設は困った状態にある施設が多かったので、現在建設されている施設に関して言えば、規制値に関する適応性という点からは、ほぼ完全にクリアできています。しかし、安心感ということを考えれば、それだけでは足りません。規制値よりもどれだけ低く計画するのか、あるいは規制値にない項目をどれだけ考慮するかということが現在の課題です。たとえば、煙の色。規制値というだけでは、視覚的に気持ちの良い色にはなりません。今のところ、多くの人が許してくれる煙の色は、規制値の5分の1か10分の1の濃度です。先に述べた乾電池の問題も、「安全」というより「安心」という観点から考えれば、分別する方がより良いことになりました。こういった安心感を提供する諸施策、それに視覚的な美しさといったことは、施設が存在する上で必要欠くべからざるもの、というわけではありません。

「あつた方がよい」といったレベルの問題ですから、コストをにらみ合わせながら選択していくことになるわけですが、市民ひとりひとりの意志が重要なポイントになるのは言うまでもありません。

煙の色というところでよく問題になるのが、それが水蒸気による白煙であるのかごみの燃焼に伴って発生する煙であるかということです。それならば、いつそのこと白煙を消してしまおうというのが最近の傾向です。これは、まだ技術的にもコスト的にも難しい面がありますが、ひよつとすると、人々が煙突の白煙を見て季節を感じる前に、煙突から白煙が消えてしまうかもしれません。

私が棄てた……

高級ハム

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちによつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

わが家の料理人は、素材を熟成させる名人です。冷蔵庫の中は、熟成されて過ぎてすでに異臭を放っている食物が、必ずといっていいほど1品か2品奥の方に放置されています。

私が冷蔵庫の中を覗いて発見した、「腐らせたしまった食物、ワースト・スリー」

1 高級ハム・メロン等、高級品、珍品の類（主にもらい物）

お客さんが来るまで、あるいは誕生日までといって保存していたのに、結局は忘れられて放置されたという、よくあるパターン。今でも残念なのは、新婚旅行でシベリアから買って来たキャビア。2年後に開封したところカビが生えていました。

2 料理人が嫌いな食べ物
お客（つまり私）の要望により、や

むなく取り揃えた品。一度出すと、それだけで存在すら忘れてしまう。塩辛、たくあん、鳥肉、納豆等々。

3 バーゲン等で衝動買いした品々。「あら安い」等と呑気な嬌声を張り上げて、ついでに得した気分を買った品々。みかん、食パン、とうふ等々。

これらの腐らせたしまった食物と毎日の食べ残しは、小さなビニール袋に入れて、しっかりと結わえて（汁が出るし臭いもするので）、ごみとして排出されます。

これは、もちろん困ったことなんです。本来なら腹に納まるべきものが、ごみとして出て来るわけですから、まづごみの量が増えます。ひとり1日100グラムの余分なゴミが出て来るとすれば、人口1万人の町で、1トンのごみ。収集車7分目のこのごみを処理

するために約2万円の費用がかかります。1年間で730万円。量が増えるだけではありません、質も変わります。この質というのが、ごみ焼却工場を設計し、運転する上で最も厄介なことの1つなのです。家庭から出されるごみには、いろいろなものが入っています。

スーパの容器、デパートの包装紙、西瓜の食べ残し、牛乳パック、にんじんの切れ端、魚のアラ、庭木の剪定くず、菓子袋、折れてしまったプラモデル……数え上げればキリがありません。こういった物を焼却する際に、それがどういった性質があるかということも判定する基準として、カロリーという単位があります。燃やすことによつて、どれだけの熱を発生するかという指標です。たとえば、部屋の片隅に放置されている新聞紙は4000キロカロリー、ニンジン、キャベツなどの野菜屑は500キロカロリー、といった具合

です。これらの物が混じり合つて、今日の日本の家庭から排出されるごみのカロリーは、都市によつても季節によつても違いますが、8000から20000カロリーといったところでしょうか。

高すぎてもいけないし、低すぎてもいけません。高すぎるとどういふ問題があるかというとは別の項で書きますが、低すぎると、これは当り前のことですが、燃えにくくなります。

現在のごみ焼却工場の場合、カロリーの8000から9000キロカロリー以上あれば、ごみ自身が持つエネルギー

で自然に燃えてしましますが、それ以下ですと、重油とか灯油とかで補助的な熱を加えてやらなければ燃えなくなります。

たとえば、ミカンを箱ごとどっさり買い込んで、炬燵に入つてテレビを見ながら、ミカンの皮を剥くというのが、昔ながらの冬の光景ですが、最近では真冬でも母が気楽に手に入るご時勢、あまり人気がありません。結局はこの箱入りミカンの大半を腐らせてしまうというのが、わが家でもよくあることですが、きちんと食べて皮だけ棄てられたミカンと、実も丸ごと棄てられたミカンと、カロリーで比較してみると、前者は700キロカロリーであるのに対して、後者は100キロカロリーに足らずです。うまく焼却できるはずがありません。わが家の料理人の罪はそこにあるのです。

「ごみ」という言葉を手元の国語辞典で調べてみると、「使つて役に立たなくなった紙くずや食物のくず、その他の廃棄物」とありますが、それからすると、腐らせたミカンや高級ハムは、ゴミと呼べるものではありません。ごみになるはずではなかったごみ、とでも言うべきでしょうか。

冷蔵庫の中ではひとときわ光り輝いていた高級な品達も、料理人のちよつとしたミスから、やがてごみとなり、嫌われ物になる……私達の日常生活の中には、「みにくいあひるの子」の逆神話

がはびこっています。

大澤正明さんのプロフィール
弘前大学理学部化学科卒。衛生工学部門技術士。
(財)日本環境衛生センター九州支局勤務。
ごみに関する論文を数多く発表している。
福岡県大野城市在住。

私が棄てた……

な—るほど。 ザ・ラップ。

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちにちよつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

「独身時代に、スーパー・マーケットが今のように発展していたら、俺はまだ結婚していなかっただろうな」と、酒を飲む度に愚痴をこぼす中年のおじさんを、私は知っています。

彼の独身時代の買い物風景はこんな具合だったそうです。

下駄をつっかけビニールの折りたたみ袋を手に、まず肉屋でステーキ用の肉を一枚か、あるいは野菜炒め用の三枚肉を100グラム買います。次に惣菜屋でコロッケを2個とポテトサラダを100グラム買います。最後に八百屋で必要な野菜を揃える。

それはそれで、気楽な生活で彼自身楽しんでおいたのですが、ある時突然、若妻、ベテラン妻たちに混じって肉を買っている自分が惨めな汚れた存在に感じられてならなくなったそうです。「それが転落の第一歩」になって、

30歳で結婚を決心したのですが、現在のようにスーパー・マーケットが発達しているのを見ると、早まったかなという気がしてならない。

「そりゃ考えてもみよ。今じゃ、肉にしても、サラダにしても、ピーマンやキュウリの類まで、ラップとトレイに包んで売っている。それをポンポンとカゴに入れてレジに持って行けばいいんだ。少しも恥ずかしいことなんかない。」

確かに、スーパー・マーケットを歩いてみると、若者から初老のおじさんまで黄色のカゴを手持って買い物をしていきますが、少しも違和感がありません。便利になったものだと、私もつくづく思います。

このスーパー・マーケットの必需品は、なんととってもラップです。野菜、果物、肉、魚から、からし明太子にい

たるまで、スーパー・マーケットの壁ぎわをぐるりと取り巻く生鮮品コーナーはラップ、ラップのオンパレード。ところが、このラップ、ごみとなって焼却した場合困ることがあります。塩化水素が発生するからです。

たいがいのラップは、塩化ビニールか塩化ビニリデンでできているのですが、これが焼却されガス化すると塩化水素が発生します。有毒ガスです。たとえば、1ppmで軽い刺激臭があり、1000ppmで生命の危険があるという報告がなされています。

これに対して、大気中の環境濃度は、0.002ppm以下にするようにという目標値が定められています。これは地上の濃度ですから、煙突の中ではその何倍もの濃度でいいわけですが、ごみ焼却工場の場合は430ppmという規制値が適用されます。ところが、実際にごみを燃やして発生する濃度は、300〜600ppmといったところ

です。かなり危ない数値です。何とかしなければいけない、というわけで、最近では専用の除去設備が設置されます。一番簡単な方法は、ガスを水で洗ってやる方法です。これでも規制値程度は十分落ちます。今一番多く採用されている方法は、ガスの中に消石灰を吹き込んでやる方法ですが、これですと規制値の半分程度まで落ちます。まだまだ低濃度にしたという場合は、カセイソーダを溶かした水で文字通りジャバジャバ洗ってやる方法があります。

規制値の数十分の一まで落とせますが、建設費、維持費共にとても大きく要します。

このように、除去技術はほぼ確率しているわけですが、それでも塩化ビニ

ール系樹脂はに越したことはない。というのも、ダイオキシンです。亀の甲羅が2つ、それに塩素がピコピココくつついた化学記号を持つこの物質は、どうやら塩化水素の影響を受けるといわれています。塩化水素濃度が高くなればなる程ダイオキシン濃度も高くなるという報告もされています。

ですから、塩化ビニール系製品はなるべく燃えるごみとして出さない方がよい、ということになるわけですが、いったい私たちが日常生活で使う品物のどれが塩化ビニール系製品であるかというところ、これが非常に難しい。ほとんど判別が不可能に近いといえるかもしれせん。プラスチック製品をよく見るとわかるのですが、何でできているかの表示がほとんどありません。

唯一分かりやすいのが、ラップです。京都大学の高月教授の論文によると、全ラップ製品の80%程度が塩化ビニール系だということだそうです。それでは80%と20%をどうやって見分けるかというと、ラップの場合比較的簡単で、ほとんどが箱に表示してあります。

しかし、どのラップを使うか、これは難しい選択です。料理用あるいは業務用等密着性を要さないラップはポリエチレンあるいはポリプロピレン製というように使い分けがされているようだからです。

前掲の高月教授の論文によると、例えば、(キュウリ)については、消費者の69%が裸売りを希望しているそうですが、実態は35%しか裸売りをしていないというように、消費者の希望と実態が一致していない面があるようです。

この辺にも選択のカギがあるようです。

私が棄てた

ちり紙

ゴミへの

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちにちよつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

父方の祖母は私が小学5年生の時に亡くなりました。その頃は、灯油ストーブは言うまでもなく、石炭ストーブもない時代で、祖母はいつも薪ストーブのそばで、足袋やら軍手やらぞうきんやらを黙々と縫っていました。その祖母から何度も何度も叱られた火の神様の教訓。火の中には全能の神がいて、常に人に暖とか熱を与えてくれる反面ひとたび怒れば家ごと灰にしてしまふ力がある。だから、火の神には最大限の敬意を払わなければならず、ひとときも粗末に扱ってはいけない。というわけで、薪以外の不浄なもの、たとえば鼻をかんだちり紙をストーブの中に投げ込んだりすると、こっぴどく叱られたものです。

そんな幼児体験を持つ私ですから、ごみを燃やす工場があると初めて聞いた時、何と罰あたりなと恐れおののいたものです。まして、その熱を利用してお風呂とか温水プールが沸かせると聞いても、とても入ってみたいという気になれませんでした。

わが国のごみ焼却工場の余熱利用の

現状を見ると、私と同じ幼児体験をもつ人々が意外と多いのではないかと気がします。

ごみを焼却することによって大量の熱が発生します。この熱をそのままにしておく、すぐ設備がだめになつてしまうので、わざわざガスに水を吹きかけて温度を下げてやります。ごみを1トン燃やすために1・5トンの水。わかりやすく言えば、通常私達がごみ集積所にだすごみ袋はだいたい5キログラムくらいのところだと思いますが、それを燃やすために必要な水の量は7・5リットル、一升ビンで4本強です。こんなばかばかしいことはありません。このあり余る熱を何とか利用してやるのができないかと考えた末に出してきたのが余熱利用設備です。もちろん、水の使用料を節約できるだけではありません。「価値観の転換」という、実に哲学的な意味もあるのです。ごみ処理というのはもともと非生産的な事業です。「工場」という名は付いていても、何かを作るわけではありません。鉄工場、木工場、玩具工場、製菓

工場、ハイテク工場……これら各種の工場と根本的に異なるのは、物を作るのではなく、物を消滅させてしまうということです。ごみ焼却工場が世間から認知されにくい理由のひとつはその点にあります。

「なにかいいことあるのかい」「いや、別に……ただ街が清潔に住みやすく……」

うつむきかげんに応えるだけ、という境遇から何とか脱皮したい。ごみ焼却工場がある時は発電所になり、ある時はプール付きレジャー施設になり、ある時は風呂付き公民館になる。非生産的な存在から生産的な存在に転換するという、いわば逆転の発想です。

というわけで、現在全国的に様々な余熱利用の方法が試みられています。まず、電力。余熱を利用して蒸気を作つてやり、それによって発電するもので、主に清掃工場で動かす機械の電力をまかなっているわけですが、それだけでなくかなりの電力の節約になります。ごみを1トン処理するために要する電気代はだいたい2000円というところですので、30万人の都市では、1日約60万円、1年間では2億円です。もちろん、温水にもなります。いこいの家のお風呂、温水プール、大きい都市では工場周辺の家庭のお風呂用としてお湯を供給している例もあります。暖房用としては、いろいろな建物の暖房から、熱帯植物園、ビニールハウス、水族館、ロード・ヒーティングまで様々な方法が工夫されています。

ところがこれだけの方法があるのに、実際にそれを設置し、利用している例というのは微々たるものです。なぜか

という、ふたつの理由があります。まずひとつは、大きな熱を供給するためには、それなりの規模の工場が必要だということです。たとえば、発電するためには、熱効率・コスト等を考えれば最低30万人分のごみが必要ですが、日本で人口30万人以上の都市はわずかに60しかありません。ならば、10万人の市が三方所共同でひとつのごみ焼却工場を作ればいいわけですが、ごみを運搬することの難しさなど諸々の点からうまくいっていません。

暖房や給湯ならばたいがい市町で提供することが可能です。現に焼却工場の中のお風呂や暖房は、多くの都市で余熱を利用してまかなわれています。ところが、それ以外にもまだまだ熱利用ができるのに、一般市民の人々を対象とした熱利用を行っている都市はきわめて少ないのです。なぜか。簡単なことです。せつかく作つても誰も利用しないからです。ごみ焼却工場は現在のところ嫌忌施設という位置付けをされていますから、どうしても人里離れた山の奥に建設される傾向があります。これは、市民の意向を敏感に察知した自治体側の自主規制といった面があるわけですが、このような山奥までわざわざお風呂に入りに行く人はまずいません。せつかく作つた余熱利用設備も、ただいたずらに無駄な温水をつくり続けたまま、3、4年後には設備自体が腐食して使えいものにならなくなつてしまふという例が多いのです。

今日も全国のどこかの街のごみ焼却工場建設委員会で、「やはり、余熱利用設備は見合わせた方が無難ですか」という声が聞かれていますことでしょうか。

私が棄てた パッケージ

ゴミへの

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる…。そんな「物」たちにちよつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

日本酒一合200キロカロリー、ビール大びん240キロカロリー、ウィスキーシングル75キロカロリー、ごはん一杯200キロカロリー、ショートケーキ340キロカロリー、かつ丼800キロカロリー、ラーメン550キロカロリー、鍋焼きうどん500キロカロリー、幕の内定食800キロカロリー。

私の手帳にはこんな数値がズラリと並んでいます。

「ATGP」知る人ぞ知るこの記号、それに「脂肪肝」「心臓肥大」というわけで、節酒節食指令。酒は日本酒オンリー、天婦羅・とんかつ大好き、ケーキにまんじゅう、おまけにヒーナツ、チョコレートなんでもござれの肥満生活から潔くおさらば、酒は焼酎、ご飯八分目、間食無しで、コーヒーはブラックという生活を3カ月。やつと肥満度13%から0%まで回復しました。

さて、昨今のごみ焼却工場、私など足元にも及ばぬ肥満体質で、青息吐息の状態。原因は人間様と同じ、高カロリーのゴミの食べ過ぎです。ほんの10

年程前までは、栄養失調気味で、重油という栄養剤なしにはとても生きていけない状態だったので、時代の移り変わりというものは思ひのほか急テンポなのだつくづく思います。

ごみが持つカロリーは、都市形態によつて大きく異なりますが、福岡県のある市の例をとってみると、昭和55年の年間の平均値が1370キロカロリーであつたのに対し、昭和63年には1850キロカロリー、およそ1.3倍にまで高カロリー化しています。

このような高カロリー化が焼却工場にどういった影響を与えるかというと、最も大きな問題は焼却できる量が著しく減少するという事です。

ごみ焼却工場を建設する場合、まず処理するゴミのカロリーがどの程度であるかという事を想定して、ごみを焼却する炉の大きさとか、送風機の容量とか、公害防止装置の規模とか、いろいろな設備の容量・構造を設計します。ところが、ごみというのは千差万別、カロリーが非常に高いプラスチック類もあれば、80%以上が水だけという台

所のごみもあります。プラスチックと台所のごみでは、燃やすために必要な空気の量も、燃えることによつて発生するガスの量も極端に違います。プラスチックの方がはるかに多いのです。たとえば、ごみ焼却工場の設備の中に、誘引送風機という機器があります。ごみが焼却することによつて発生するガスを、炉から公害防止設備、そして煙突まで引っぱつてやる装置なのです。プラスチックの量が異常に多いと、この誘引送風機の能力が不足することになります。これは大変面倒なことで、煙を引いてやるのが出来なくなるわけですから、炉の温度が上がり過ぎるし、工場のあちこちから煙が出て来ます。もちろん、そんなことになるので、処理する量を減らして対処することになります。このような誘引送風機に起因する問題を抱えている施設が全国で約40%にも上るといふ報告もあります。そのほとんどが、ごみが計画時より高カロリー化していることが原因です。

このごみの高カロリー化がなぜ起こつてきているかというと、使い捨て製品の普及とか、円高などに起因する古紙回収の低迷とか、いろいろ理由は考えられるのですが、なによりも過剰包装によるところが大きいのではないかと考えられます。たとえば、入学式か何かのプレゼント、まずバラを形取つたリボンがあつて、豪華な包装紙に包まれた中には厚手の箱、おまけに本体が割れ物ということになると、箱の一面にクッション材が入つていて、こういったデパートによるもの以上に問題なのは、スーパーマーケットのパッケージです。生もの用のラップとトレイ

に始まって、菓子袋、インスタント・ラーメンの袋、つくだにのパッケージにいたるまで、ほとんどが何らかの容器に入っています。先日近所のスーパーを歩いてみたところ、裸売りしている食料品は、セロリ、ブロッコリ、みつば、青じそ、パイナップルの5品だけだつたのには驚きました。

京都市がごみを子細に分析調査して結果によると、家庭から出されるごみの約60%（容積比）が容器・包装材だつたということです。こういった容器・包装材は、高カロリーの原因になるだけであつて、ごみ量の増加とか、嵩が大きいことによる収集経費の増加という弊害を生むので、困つたことなのです。人間の熱源栄養素といわれるのは、糖質、脂質、タンパク質。この3つの栄養素のカロリーは、糖質・タンパク質は1キログラムあたり4000キロカロリー、脂質は9000キロカロリーです。一方、ごみ焼却工場に入ってくるプラスチック類のカロリーは、脂質とほぼ同じ値で、他を圧倒する高カロリーのプラスチックを、たとえ人間様が食べたとしても肥満の原因になるようには見えないが、という疑問。身につまされる境遇にあるだけにさつそく調べてみたところ、人間の食物のカロリーは消化吸収率を考慮して計算されるのだそう、一般的に糖質は吸収率が高く、タンパク質は低い。さすがにプラスチックの吸収率は載つていませんでしたが、たぶんゼロに近いのではないのでしょうか。その点、ごみ焼却工場の場合、プラスチックの吸収率（焼却率）はほぼ100%ですから、工場がブタになるのも無理がありません。

私が棄てた 灰皿

ゴミへの

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる…。そんな「物」たちにちよっと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

恥ずかしながら、私も「ノルウェイの森」を買って、読みました。四十過ぎたおじさんが、あの赤と緑のキンキラ表紙の本を買うのは勇気がいりません。もちろん、私にはそんな勇気がありませんから、妻に買ってもらうことにしたのですが、敵もさるもので、あの本を買ってサマになるのは33歳までの女性なのだ、34歳の彼女は主張して譲りません。やむを得ず、料理の本こみで買うということを手を打つことにしたのですが、2冊2000円の「ノルウェイの森」が3500円にまでブレミヤが付いてしまいました。

著者初の恋愛小説というキャッチフレーズのついた本ですので、おじさんとしては内容に言及するのは抵抗があるわけですが、1カ所大変身につきまされるところがありました。

「僕」と「レイコさん」の会話です。

「よかつたらわたしのぶん食べていいわよ、これ。私もうおなかいっぱいだから。食べる？」「要らないのなら食べます」と僕は言った。「私、胃

が小さいから少ししか入らないの。だからごはんの足りないぶんは煙草吸ってうめあわせんの」彼女はそう言ってまたセブンスターをくわえて火をつけた。

この煙草を食べるといふ感じ、禁煙数カ月間でブクブク太った経験を持つ私としては、実に共感できる話ではありました。

煙草というと、近年とみに煙草の害が声高に叫ばれているわけですが、マーク・トウエインの名言「禁煙ほどやさしいものはない。私は今までに何百回もタバコをやめたことがある」にならったわけではありませんが、私もこの1年間で最高3カ月、最低1日の禁煙を5回経験していて、禁煙の害にまつわる話は耳にタコができるような状態です。ここは灰皿の行方といったことを考えてみたいと思います。灰皿とはいっても、普通のちゃんとした灰皿ではなく、近くに灰皿がないような時、公衆マナーに比較的敏感な方は、ジュースやビールの空缶を灰皿代わり

にすることがあります。あれはなかなか重宝するもので、ジュースをひと口分残した状態で使っていると、中で煙が燃えることも人の息で灰が飛散することもなく便利なものです。

この簡易灰皿、使い終わった後はごみとして棄てられることになりませんが、可燃ごみとして出すか、不燃ごみとして出すかは、入さまさまなようです。中の煙草に注目する人は可燃ごみと判断するでしょうし、缶に注目する人は不燃ごみと判断するでしょう。

可燃ごみとして出された場合、大部分の市町村では、他の紙とか台所のごみとかと一緒に焼却処理されます。最近建設されるごみ焼却工場の場合ほとんど未燃物は残りませんが、なかの煙草は燃えてなくなりますが、缶はそのまま残ります。この缶は本来なら選別して資源として利用すればいいわけですが、付着した灰は取り除きにくい上に、量的にも少ないので、多くの場合そのまま埋立てられます。

一方、不燃ごみとして出された灰皿は、市町村の処理体制によっても違いますが、最近では、破砕機によつて処理されます。今、最も広く採用されている破砕機は、衝撃せん断回転型といつて、ハンマーのよつなものが回転しながら、ごみを叩き壊すというやり方です。冷蔵庫のような大きい物はバラバラに壊れますが、空缶のような物は、めつたにち切れることはなく、潰された状態で出て来ます。ですから煙草の吸い殻が入った空缶は煙草入りのまま潰されてしまいます。これが困ったことで、鉄やアルミの再生工場は、こういった不純物が入った缶を最も嫌います。

回転型破砕機は、冷蔵庫・自転車・びん・缶にいたるまで丸ごと処理できるといふ大変便利な機械なのですが、こういった不純物をなかなか選別しにくいという機能的な問題の他にも、やっかいな問題をいくつか抱えています。ひとつは爆発の問題です。回転するハンマーが金属を叩き壊すわけですから、ちよつとした爆発物が入ってきただけで大事故となります。ガス検知機とか考えられる安全対策は講じているのですが、今のところ上手くいっていません。スプレー缶が1個人入つて来ただけで、爆発・火災を起こし、その修理のために1億円以上もの費用がかかったという例も聞きます。私達が何気なく棄てたスプレー缶が1億円もの損害を与えたというのは、かなりゾッとする話です。どこの市町村でも、スプレー缶は穴を開けて出すようにと頻りに宣伝しているのですが、うっかり者は必ずいるようで、1回や2回の爆発事故は経験させられているようです。小型のガスボンベが混じっていたという例もたまに聞きますが、これはうっかり者ではかたづけられない種の間人間かもしれません。

もうひとつ破砕機で困る事は、処理できない物があるということです。たとえばモーターのように硬い物はどうな破砕機でも処理できませんし、ベッドのスプリングのような弾力のある物も無理です。破砕すると有毒な物、たとえば乾電池は困りますし、PCB入りのテレビも困ります。

こういった処理できない物は、各市町村の処理形態によつて全く異なりますので、自治体の配布するパンフレットをよく見ておくことが大切です。

私が棄てた…… ぶら下がり健康器

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる……。そんな「物」たちにちよつと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

行きつけの焼鳥屋のおやじは、傲慢
ちやらんぼらんを絵に描いたような人
です。

ある時、一緒にやっている奥さんが、
客に強引に酒を勧められた時のこと、
「家内は、酒を飲まなくちゃいけない
程不幸な人生を送っていないのでね」と、
ちよつとカッコウのいいことを言
つてしまったのだからたまりません。
酒を飲ませる仕事をしていながら、酒
を飲む程不幸じゃないとは何事だと、
たいへんなひんしゆくをかってしま
いました。

いつだったか、その焼鳥屋で、職場
の大先輩とお酒を飲む機会がありまし
た。ちよつと末の息子さんが、大学の
入試に合格した日のことです。人は嬉
しい時に酒が入ると、妙にしんみりし
てしまつらしく、

「子供が3人もいるとな、そのうち
ひとりくらいはグレるとか、親を泣か
せるような子供がいても、それは珍し
いことじゃない。なにしろ3人もいる
のだから、皆が皆良い子になれとい
うのは無理な注文だと思う。だから、3

第一まったく罪のない世界です。お酒
2合の世界というのは、人類が持つ心
根の最も美しい空間ではないかと私は
常日頃思っている程です。

ところが、そんな人間もひとたびシ
ラフになると、とんでもない夢と幸せ
を買ってしまいます。
我家の物置に眠っている夢と幸せの
残骸の数々。

その1、ぶら下がり健康器
「幸せな家庭はまず健康から」とは
思っても、街中をジョギングするのは
恥ずかしいし疲れるし、水泳するにも
泳げない。ひとりで黙々とルームラン
ナーは暗過ぎる。だからぶら下がり健
康器。もちろん続くわけもなく1年で
倉庫に眠るはめになりました。

その2、美顔器
「いつもいい顔していたいの」とか
なんとか言ってみて、20秒間息止めブ
クブクやってみただけれど、半年後には
「顔の形まで変わらないものなのね
え」とブツクサ言いながら、物置に放
り込んでしまいました。

その3、赤ちゃん用ブランコ
毎日毎日子供を近くの公園に連れて
いっているうちに、「あのブランコが欲
しい！」と思いつき、遂には、幸せは
あのブランコを手に入れることにあり
とまで思いつめ、ひとときの幸せを買
つてみたものの、6畳間でブランコを
揺らすことの虚しさを知った時は後の
祭り。

その4、ジュース
毎朝混じりつけなしのジュースを飲
みたいというのは、かねてからの夢で
した。だから、ジュースを買った当
座は、自分自身が今日ではペセリ・レモ
ン・リンゴ、明日はミカン・パイ
ン・

ニンジンといった具合にブレンドを楽
しんでいたのですが、なにしろジュ
ースというのは絞りがすの掃除が大変
半年でホコリを被ってしまったので
が、いつか「お掃除簡単、パックでポ
イ」なんていうCMが現れたら懲りず
に飛びつく予感が。

その5、ツンドク書物
「この本さえ読めば飛躍的に賢くな
れる」という幻想を最初に抱いたのは
中学1年生の学習参考書。以来30年
に
なんなんとする今日迄、懲りない夢追
い人はプロロク読書の達人。

その6、ワープロ
この文章を書き始めるまで、10万円
のワープロは1年半眠り続けていたの
です。危ないところでした。

その7、机
長男が小学校に入学した時に買った
学習机は、私の机より横、奥行ともに
10センチ大きかったです。大いにプ
ライドを傷つけられた私は「古い机を
どうするの」という妻の忠告を無視し
て、新しい机を買ってしまったので
が、なるほど置く場所がありません。
古い机の上は、本棚とテレビと時計、
ついでにツンドク書物の4、5冊が……
まるで高層ビルのような感じです。

これら、夢と幸せを追い求めた残骸
達は、本来は不要であったはずの収納
用倉庫を買わせ、いずれは、引っ越し
とか何やら、人生の転機といった機
会にいっせいにごみとして棄てられる
ことになりました。
「夢は追い続けるものであって、買
うものではない」
と、自戒の意味も込めて宣言しておく
ことにします。

大澤正明さんのプロフィール

弘前大学理学部化学科卒。衛生工学部門技術士。
(財)日本環境衛生センター九州支局勤務。
ごみに関する論文を数多く発表している。
福岡県大野城市在住。

私が棄てた

雨に濡れたお人形

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる…。そんな「物」たちにちよっと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

小学校の頃かそれ以前の頃は覚えていませんが、私は母から事ある度に、悪いことをしても必ず誰かひとりかふたりはどこかで見ているものだ、と教えられました。

「誰がみているの」と私は聞きました。「家にいる時はお父さんやお母さんが必ず見ているし、外を歩いていてもよそのおじさんがお仕事しながら見ているし、学校に行けば先生が見ている。誰も見ていないようでも必ず誰かひとりかふたりは見てくれるものなの」と彼女は答えました。

私はもともと信じやすい性格なものですから、かなり長い間母の言葉を信じ、よく言えば正しい道を、はつきり言っただけでばうんざりするほどいくじのない道歩んで来たわけですが、その束縛が解けた頃、もうひとつの（誰か）に捕らわれるようになりました。

「……誰ひとり山を海中へ移すことのできる人なんかいません。そんなことのできる人は、全世界にひとりか、多くてもふたりぐらいのもので

おまけにどこかエジプトの砂漠の中でこっそり修行しています」

ロシアの文豪ドストエフスキーの最後の長編「カラマーゾフの兄弟」の中の一節です。これに対して、カラマーゾフ家の知性の象徴とでもいうべきイワンは「山を動かせる人間がふたりはいるという発想はいかにロシア的だ」というような発言をします。

……同じひとりかふたりでも、日本とロシアでは何とスケールが違うのだろう。悪い事をしないように監視する人間がひとり」と「超人がひとり」と。それ以来、ロシアの大地が憧れの的になりました。ドストエフスキー風な表現を見ると「熱病にかかったように」憧れ続けました。

今、わが国の市町村の清掃部門担当者で、別な意味で、ロシアの大地に深い憧れを抱いている方がたくさんいます。「あれだけ広い国土があれば、ゴミ問題なんて一遍に解決するだろう」と、嘆息まじりに憧れの眼を向ける方がいらつしやいます。

日本のゴミ問題の最大の難題は、焼却した灰をどこに埋め立てるかということ。この狭い日本では、埋め立てができる場所は限られてきます。日曜日に自転車でも乗りながら、郷土探索してみれば分かることですが、ゴミを埋め立てられるような格好な谷はほとんどありません。それにも増して事を面倒にしているのは付近住民の同意を得にくいということです。

厚生省が全国115カ所の埋立処分場を対象にアンケート調査をした結果によると、「埋立処分場の確保が難しい」と回答した施設は95パーセントにも上ります。また、確保し難い理由としては、「住民の同意が困難(69パーセント)」「地形的に困難(19パーセント)」があげられています。

確かに埋立地は辛い立場にあります。まず、それができて良いことは何ひとつありません。ゴミ焼却工場のように熱を利用したお風呂もプールも温室もできません。たつたひとつ、たとえば山間に埋め立てた場合、何十年か先に平地ができて広場になったり野球場になったり、という期待はあります。しかし、人間はせっかちです。何十年も未来のことまで考えている余裕はありません。それに、ちゃんとした方法を採らないと、困った事がたくさん起こります。雨が降るとゴミ層を通過した汚水が出ますし、臭いもします。ゴミが発酵してメタンガスが出ることもありますし、埋め立てる物によってはカラスやネズミも発生します。

現在行われている中で、最も近代的な方法は、まず、汚水が出ても地下に浸透しないようにゴムシートを貼っておいて、集めた汚水はきれいな水に処

理します。カラスやハエが発生しないように毎日土を被せ、ガスが出て火災が発生しないようにガス抜き管を埋設します。しかし、何しろ相手は偉大な大地のことです。何十年も未来に係わることです。100パーセントの自信はありません。

こういった辛さを解消すべく、今、未来に向けてふたつのことが試みられています。

ひとつは、埋め立てる物をガラス玉のように硬くきれいにしまえば、たとえ雨が降ろうが風が吹こうが、汚水は出ないし臭いもないという考え方で、「溶融処理」という方法が採用されています。普通の焼却工場よりも数百度も高い温度でゴミを溶かすと、カチカチの小石状のスラグに変わります。黒褐色の光沢を帯びた、きれいな粒々です。この方法はまだ技術的にもコスト的にも充分確立されたものとはいえませんが、未来に希望を抱かせる方法です。

もうひとつは、陸地に場所を探せないのなら、周囲を海に囲まれた日本という地理的な特徴を生かして、海に埋め立ててしまおうという考え方で、「フェニックス計画」といいます。大阪湾、東京湾といった大都市の港湾に人工島を作り、そこにゴミを埋め立てるわけです。技術的には、東京夢の島で実証済みですが、海にゴミを埋め立てるといふ発想、奇抜で斬新、狭い国土日本ならではのところでしょう。ちなみに、「フェニックス」の命名の由来は、ゴミとして棄てられた物が新しい土地となって甦りやがて緑の植物を成育させるといふ、エジプト神話の中の不死鳥と観葉植物のフェニックスにちなんだものだそうです。

大澤正明さんのプロフィール

弘前大学理学部化学科卒。衛生工学部門技術士。
 (財)日本環境衛生センター九州支局勤務。
 ごみに関する論文を数多く発表している。
 福岡県大野城市在住。

随想

第14回

私が棄てた 燃やす風景

ゴミへの

「物」と名のつくものすべて、棄てられるその瞬間までにはロマンがあります。しかし、棄てられ「ごみ」と名を変えられたその時からロマンは消え失せる…。そんな「物」たちにちよっと優しい目を向けた、本誌読者・大澤正明さんから寄せられた生活エッセイです。

私には2年間の大学浪人の経験があります。その2年間のうち1年は札幌の子備校で、もう1年は人口6千人の故郷の町で過ごしました。田舎で過ごしていた時、勉強に飽きると家の前の浜に下りて息抜きをしました。浪人生が人口6千人の街中をぶらつくのは、私にも両親にも楽しめることではなかったのです。勉強には年がら年中飽き飽きしていたので、晴れた日には2時間か3時間は浜にいたものです。浜に下りて何をしていたかというと、流木を拾い集めてたき火をしていました。じっと海を見ているだけでは退屈すぎたので、せめて火を焚こうと思ったのでしょうか。時化の翌日は流木がたくさん打ち寄せられていて、朝からそわそわ落ち着かなかったものです。

ある時、いつものようにたき火をしながら海を見ていると、父が浜に下りて来て私の横に座りました。そんなことはかつてなかったことなので、私は妙に緊張しました。「どうだ」と父が言います。

「うん」と私がこたえます。「今日はよく見えるなあ」対岸のうっすらと霞んで見える山を顎で指します。増毛という山なのだと小さい頃から教えられました。

それだけの会話でしたが、今でもひとり酒を飲むとパチパチと流木のはじける音と共にその光景を思い出すことがあります。泣き上戸の気があるのか、涙が出てくることすらあります。

というわけで、実は私はたき火の一口を自認しています。マッチ一本とテイスシュ3枚で流木に火を点けられるという、ちよっとした技術を持つています。

その私をもつてしても、ひと昔前の焼却炉で「ごみ」をきれいに燃やすことは難しいだろうなと思います。まず、燃やすための装置自体が七輪に毛がはえたようなシロモノでしたし、ごみの質も今とは比較にならない程カロリーが低くて、炉の中でねずみが運動会をしていた施設もあったと聞きます。

それから10年もたたない、昭和55年頃からごみ焼却場は飛躍的な進歩をとげました。たしかに日本全体が裕福になったお陰で、ごみも高カロリー化して燃えやすくなったこともありましたが、燃やすための設備が進歩したことが大きいのです。現在の燃焼設備の流行タイプは「揺動式ストーカー」といって、階段状の設備が微妙に前後して、ごみをうまい具合に転がしてきれいに燃やしてしまふ方法です。「流動床式」といって、砂と一緒にごみも燃やしてしまふ方法もさかんに採用されています。

いずれもほとんど人手を煩わすことなく、機械がやってくれます。人間はただ機械が順調に動いているかどうかを監視していればよい……というわけには、実は、いきません。まず、機械は故障するものです。大きな故障になると、何日間稼働をストップさせて修理することもあるわけですが、しかし、ごみはそんなことはおかまいなしに毎日出て来ますから、たちまちのうちにごみがあふれてしまうことになり

ます。それに、機械には経験という知恵がありません。微妙な味かげん、火かげんといったものは機械では読み取るのができません。どうしても人間の経験に基づいてくが要求されることとなります。

沖縄県の宮古島に親泊さんという技術担当者がいらつしやいます。親泊さんが運転されている工場は決して最先端の高度な設備を有しているとはいえません。稼働を始めて以来すでに13年も経過していますから、古いタイプと

言っているかもしれませんが、工場のいたるところがピカピカに磨きたたえられていて、土足のまま入り込むのはちよっと気が引けてくる程です。

その親泊さんの機械を運転するモットーは「目・耳・鼻」なのだそう。色と音と臭いに神経を集中させていけば、機械の状態が正常であるか異常であるかが簡単に把握出来るというのです。

心と頭をときすましているれば機械の心も読めてくる。これは機械に限らず人間とのつき合い方にもあてはまることかもしれない。

なるほど、そう考えて、私の過去40余年の人生を思い起こしてみると、確かにあのときももう少し神経をとぎすまして接していたら相手の心情を理解してやれただろうに、少しでも不幸から救ってやれただろうにと悔恨の念を伴って思い出す出来事がいくつもあります。

「水」や「緑」が人の精神を高めることがあるとはよく言われることですが、私の場合は「火」がその役割を果たしてくれたようです。浪人時代のたき火は自分自身を見つめる方法を教え、親泊さんは人を見つめる方法を教えてくれたのですから。

ところで、機械には経験という知恵がないと書きましたが、最近はその持つ経験までもコンピュータに組み込んでしまおうという手法もさかんに議論されています。何やら淋しさを感ずるものは、私も古い人間になりつつあるということなのでしょう。

ゴミへの

再びロマンの行方

あとがきに代えて

棄てられる瞬間にロマンを失っていく「物」。
棄てようとする「物」に心を配る律儀さがあつたら、
人は、無造作にゴミを棄てなくなるかもしれない。
本誌読者・大澤正明さんのエッセイ、最終回です。

「ぼくは律儀な人間だ。『生まれ』の赤信号を見ると、止まる。『すすめ』の青信号になつてから、やっと歩き出す」

数えたことはありませんが、たぶん数百冊の小説を読んできました。ところが書き出しの文章を空でいえる小説と言ふのは意外と少ないもので、たったの3冊しかありません。「国境の長いトンネルを抜けると」(雪国)、「今日ママンが死んだ。ひよつとすると、昨日かもしれないが……」(異邦人)そして冒頭の一節。アクションノフ「星の切符」という小説です。

ここは私もアクションノフに倣つて、「ぼくは律儀な人間だ。車を運転する時は決して制限速度プラス10キロメートルで走つて、自動車を通過した後には必ず、振り返つて閉まるのを確かめるし、自動販売機を利用する時はたとえ、品物を取り出すのを忘れることはあつても釣銭は間違いなく受け取る」
ついでに、「ぼくは小市民的な人間だ。ミカンを決つてヘソの方からむくし、書店に並べられた週刊誌は2冊目から取るし、好きなおかずは最後に残しておくし、文庫本を買う時は解説を読ん

でからにする」

人はなぜ、ゴミを無造作に棄てるのでしょうか。本文を書くにあつてまず考えたことは、それでした。

私たちは、知らせるための努力を怠つていたのではないだろうか。なぜ、「ゴミ」という得体の知れない物体に頭を痛めているのか。それを知つてもらう努力をすべきではないか。本文を書こうとした動機はそれでした。

つたないながらも書き上げた今、これによつて少しでも、人はゴミを無造作に棄てなくなるだろうか、と自問してみましたが、残念ながら「ノー」でした。なぜだろうかと思つてました。簡単なことです。人は棄ててしまったもの、にまで心を配るのが面倒だから。ハイキングの帰りに弁当の容器、ジュース缶を持ち帰るのはとても面倒なことだし、燃えるゴミと燃えないゴミと資源ゴミの3つの袋を用意することも面倒なことです。

その面倒くささをどう解消すればいいだろうかと思つた時、冒頭に書いた「律儀」という言葉が浮かんできました。棄てようとするものに心を残す、

心を配る、そういう律儀な生き方、極言すると小市民的な生き方が人々の間に習慣化したら、ゴミ問題はすべて解決すると思つたのです。

ところが、これがむずかしい。私自身、こういう仕事をしながら、環境問題に対して神経質なタイプではありませんが、吸殻をたまたま道路に捨てることでもあります。職業人としては失格だと自責の念にとらわれ、「いや、その、これは公人としてではなく、私人として……」と靖国神社を参拝する政治家並の言い訳の言葉をつぶやいたり、これは、ただ単に面倒だからというよりも、人の生き方にかかわる独特の美意識に由来するものかもしれません。

棄てる、という行為には、ニヒルさとかスマートさとか、なにやら人の美意識をくすぐる雰囲気漂っています。「女を棄てる」というのはその典型で、律儀さとはほど遠いカッコのよさがありますし、テレビや映画でも、館ひろしとか、柴田恭平とかがタバコを無造作に路上に棄てる時がアクションの始まりという趣があるわけです、昔私がワンカップ大関を思いっきりプロック塀におつけたことだつて、今思い出すとなにやら「青春」という感じがしていい気持ちにさせられることがあります。

このように「棄てる」という行為は人の生き方の美意識に深く根付いているわけですが、それに反して「律儀さ」というのはどう見ても高い評価を与えられていません。

アクションノフ「星の切符」の、冒頭の文章の続きがどうなっているかという、
「……弟のやつは別だ。 टीमカ

は赤信号でもおかまいなしに突つ切る。よつするにやつはいつも、気の向いた方へいきなり突つ走つてゆくのだ。」
これでもこの小説の主人公が誰になるかということが一目瞭然なほどで、律儀さというのは肩身のせまい存在なのです。

この美意識の差をどう克服するかということになる、私達にはどうすることもできない問題です。

たとえば、路上に棄てたタバコをさりげなく拾い上げ、ハンカチに包んでポケットに入れる……こんなシーンをニヒルに演じてくれる俳優さん、いませんか。塀におつて叩き割つたワンカップ大関の破片を自ら拾い集める姿に男の寂しさを感じさせてくれる小説家の方いいませんか。

遠藤周作氏の作品に「私が棄てた・女」というのがあります。その最後のページに、かつて主人公が犬ころのように棄てた「ミツ」という女性を回想するような文章があります。

「その数えきれない人生の中で、ぼくのミツにしたようなことは、男なら誰だつて一度は経験することだ。ぼくだけではないはずだ。……しかし、この寂しさは、一体どこから来るのだろう。ぼくにはいま、小さい手がたい幸せがある。その幸福を、ぼくはミツとの記憶のために、棄てようとは思わない。しかし、この寂しさはどこからくるのだろう。」

私自身も含めた多くの人が、「ミツ」という名を「ゴミ」という言葉に置き換えて、ロマンを失つた物たちに接していきたいものだ、私は今、考えています。

大澤正明さんのプロフィール

弘前大学理学部化学科卒。衛生工学部門技術士。
(財)日本環境衛生センター九州支局勤務。
こみに関する論文を数多く発表している。
福岡県大野城市在住。